

01 友利 洋一  
eスポーツ白チーム「SCARZ」代表  
eスポーツなどの新しいカルチャーを受け入れ、若い人をバックアップする空気が好きです

02 神領 龍生  
趣味のミニカーと自給自足の活動をコラボさせSNSで発信する  
昼と夜のギャップがあり、時にアンダーグラウンドな雰囲気を感じ出すのは、川崎ならでは!

03 川瀬 大陽  
ボクシング「ジュニア・チャンピオン」スリーグU-12男子45kg級で優勝  
正月にいっぱい人が集まる川崎大師で聞くトントコ船の音がお気に入り

04 阿部 英夫  
環境保全団体「多摩川クラブ」メンバー  
かつてひどい環境だった多摩川ですが、今では自然豊かな川に見事に再生を果たしました

05 吉田 絵理子  
川崎協同病院医師  
差別をなくし、人権を尊重する条例があることは川崎で働く一人として誇らしいです

06 米澤 奈緒  
川崎区盛り上げ隊「隊長」  
「いいじゃんかわさき」や「市民祭り」などお祭りがたくさんあって、活気に満ちています

07 秋山 すみれ  
女子学童軟式野球の神奈川県選抜チームでキャプテンを務めた  
等々力球場と、私たちの声が反映されてボール遊びのできる公園があることが自慢です

08 五十嵐 努  
子どもの権利委員会委員、和太鼓や子ども食堂で子どもに寄り添う  
多文化共生のまちをアピールする川崎が好きです。地域に住む人のお互いを思いやる気持ちを感じます

09 成川 七郎  
加瀬山の草刈りなどを行なうボランティア団体「さいわい加瀬山の会」会長  
加瀬山に残る自然をはじめ、向ヶ丘遊園のばら苑や日本家園など落ち着ける場所があります

10 小川 寧々  
全日本小学生女子相撲大会、4年生以下35kg未満級2位  
大きな遊具と広くてボール遊びのできる北加瀬無野台公園がお気に入りです

11 浦山 利博  
全国PTA川崎会実行委員長、幸区PTA協議会会長  
PTA活動やまちづくりなど、みんなが関わって地域を作っていると感じています

12 マイケル・ウイリアムズ  
映像制作を行うウイローラックス  
私が日本語を学んだ川崎国際交流センターは、みんなが打ち解け合えるコミュニティがあります

13 福岡 誠  
鉄道のおもしろさを伝える「鉄道新聞」編集長  
幸区「新鶴見機関区」を筆頭に、鉄道をコンテンツとしてまちを盛り上げていきます

14 青柳 晃洋  
川崎工科大学出身でプロ野球・阪神タイガース投手  
高校近くの商店街の方々も僕たちのことを応援してくれて、人の温かみを感じます

15 植木 理子  
女子サッカー、日テレ・東京ヴェルディレベラーザ選手  
公園が多く、スポーツの熱に溢れる川崎市で育ったからこそ、サッカー選手になりました

16 方山 れいこ  
駅構内の音を視覚化する装置「エキマトレ」のデザイナー  
交通アクセスが良く、とにかく住みやすい。休日の多摩川の散策がお気に入りです

17 大西 絵満  
かわさき市民放送株式会社(かわさきFM)代表  
いい意味で「おせっかい」。川崎の良さをみんながラジオを通じてたくさん教えてくれています

18 反町 充宏  
NPO法人カワサキ音楽ボックスキャスト理事長  
街中に溢れる色々な音楽、夢を叶えるために自分の可能性を広げてくれるまちです

19 佐藤 由加里  
かわさき子ども食堂ネットワーク代表  
市民団体がのびのび活動できるように、周りの人々がほどよい距離感で見守ってくれています

20 鈴木 真智子  
子どもたちの環境活動を支援する「とろろ水辺の楽校」創設者  
土手の上から見た多摩川の風景が大好き。特に夕陽が落ちていく様子に引かれます

# KAWASAKI 100

## Roots of

～99年から100年への「+1」～

# 99年。

人口5万人程の小さな種から始まった川崎市。大地に根を張り、幹を伸ばし、多様性を可能性につなげ、成長してきました。「カワサキノコト 川崎市市勢要覧2023」では、市民99人の「川崎の好きなところ」を紹介するとともに、約154万人を擁する大樹へと至るまでの歴史のルーツを探ります。さあ、100年に向けて起源をめぐる旅に出かけよう。川崎の好きなところを教えてください。100人目は、きっと、あなたでありますように。

21 石井 絵美  
40～80代介護の勉強会代表  
やりたいことに挑戦する人、それを応援する温かい人がたくさんいるところが好きです

22 高村 優奈  
かわさき若者会議メンバー  
もの凄スピードで生まれ変わる川崎市には、たくさんのエネルギーがあります

23 大山 隆久  
日本理化学工業株式会社代表取締役社長  
すがすがしい気持ちに瞬でしてくれる生田緑地は、リフレッシュのためによく訪れます

24 松田 美由紀  
コミュニティスペース「みんなの森」代表  
仕事、結婚、出産など自分を成長させてくれた思い出が詰まっている大切な居場所です

25 吉沢 春陽  
子どものために学びの場を提供する「かわさき芽吹塾」代表  
古き街並みと新たな街並みが共生する川崎市で、同じ志を持つ若者と出会えました

26 松藤 展和  
アップコン株式会社代表取締役社長  
「ものづくり」を行う企業を大事に育てていこうという取り組みが充実しています

27 テチャーナ・ソロツカヤ  
ウクライナ出身、各地で被災者支援を行う  
緑豊かな菅生緑地が大好き。ウクライナの友人とも足を運んで、芝生に寝転がるのが幸せ

28 石井 賢  
四肢を切断した人などで行うアンブティサッカー日本代表  
フロンターレなどスポーツチームが強く、アンブティサッカーの日本選手権も開かれています

29 日吉 拓哉  
多摩美術大学4年生、葉加瀬太郎のアルバムジャケットを手掛けた  
今もしょっちゅう小学校時代の友達と会って遊ぶくらい、地元とのつながりが強いです

30 深川 深雪(スノーター)  
みやまえ子育てフェスタ企画委員会メンバー、区イベントなどで司会を務める  
新しく住み始めた人も長く住む人も楽しく認め合うハッピーな雰囲気に包まれています

31 高木 一弘  
飛森谷戸の自然を守る会代表  
ホテルが舞う里山の風景や、「やってみたらいいじゃん」と応援する川崎の風土が大好きです

32 野口 豪  
福祉作業所「はたけベーカリー」代表  
都心近くに田畑があり、その環境を生かして多世代が活発に活動しているところが魅力です

33 鍛本 亜里  
みやまえ有志の会代表、宮前区まちづくり協議会理事長  
川崎市は広い!区ごとに異なる環境の中で描かれる色々な未来を感じられます

34 清水 まゆみ  
川崎の農業を市民の立場で応援する  
川崎に伝わる伝統野菜と若手農家のアイデアを融合させる食文化が素晴らしい!

35 蔣 香梅  
川崎市外国人市民代表者会議11期、12期代表、国際交流協会所属  
外国人にも優しく、多くの触れ合いがあって多文化共生を進めている川崎が大好きです

36 安藤 はるか  
地元の老舗ふとん店(中村屋ふとん店)5代目の孫  
多摩川梨狩りなど自然がいっぱい!昔のお地蔵さんに、登下校の時間にお祈りしています

37 岩佐 そよ  
拼形一輪車クラブに所属し、全国一輪車大会で4連覇した  
スポーツが盛んで、私の一輪車のクラブでは、一人一人が強くなるとう頑張っています

38 流田 あかね  
地域で手書きの似顔絵を描いている  
子ども夢パークや緑化センターなど、子どもと遊びに出掛けられる場所がたくさんあります

39 熊谷 薫  
アートプロジェクトを行う「TAMA VOICES」代表  
自然や都会などのまちの資源を生かして、地元を盛り上げようとする人がたくさんいます

40 間瀬 秀和  
かわさきプラネタリウム同好会会長  
かわさきと緑の科学館など、気軽に行ける文化施設が充実。散歩して楽しいです

41 前浜 政次  
令和4年度「かわさきマイスター」に認定された三線職人  
沖縄の伝統芸能を披露する場があり、文化を受け入れてくれていると実感します

42 清水 年子  
日本家園ボランティア炉端の会・第1期生で28年間活躍した  
多摩丘陵の自然の中に建つ日本家園は、昔ながらの風景を感じさせてくれます

43 高橋 大地  
全国高校囲碁選手権大会神奈川県大会の個人戦で優勝  
囲碁を愛する人がいて、活動も盛ん。小田急線や田園都市線は友達と遊ぶのにも便利です

44 本多 夏萌  
あさお希望のシナリオ実行委員会副委員長  
若い人が多く、力を合わせれば何かを成し遂げられる可能性を感じさせてくれます

45 井上 広基  
麻生区の2代目、3代目農家の団体「畑から、台所へ。」代表  
畑のすぐ近くに商業施設があり、生産者とお客さんの距離の近さを感じます

46 鈴木 昭弘  
麻生観光協会事務局長  
地域にスキルを還元しようと、まちづくりに積極的に関わろうとする人が多くいます

47 岡村 浩志  
KAWASAKIしんゆり映画祭実行委員長  
文化への関心が高く、芸術に関わる人を育てる土壌もあり、芸術の香りに満ちています

48 丸山 博子  
あさお芸術のほろひコンサート推進委員会委員長  
街中に笑顔で挨拶をする声が響き、芸術と文化の芽が育まれるまちです

49 森政 忠雄  
原爆被爆者団体「被爆体験を語る「川崎市折鶴の会」」会長  
芸術的なグループが多く集まる新百合ヶ丘では、各団体が積極的に活動しています

50 今井 雄也  
地元・麻生でSDG活動に取り組む一般社団法人サステナブルマップ代表理事  
私の住む麻生区は、仕事・まち・農の距離感が近く、持続可能な社会に近づいています




川崎駅上空から多摩川河口方面を望む

## 川崎を育んだ「ふるさとの川」多摩川 市民が創る「新たな交流の場」へ

「かがやく雲をいろどる多摩川」。市制10周年を記念して制作された「川崎市歌」でも歌われているように、多摩川は、市民に親しまれ、歴史的にも地域の産業の発展に寄与してきました。そして今、川崎のシンボルであり、「ふるさとの川」である多摩川は、市民が憩い、遊び、学ぶ場となっています。

KAWASAKI Roots of 99  
**51**

多摩川クラブ代表  
**中本 賢**



市民の力で劇的に再生し、自然の大切さや新しい価値を教えてくれる。多摩川は、川崎の誇りだね

多摩川流域に30年以上住み、都市と環境の共生を見守り続ける。川崎の文化・環境の啓蒙活動を行う有志団体「多摩川クラブ」では自作の紙芝居や水辺の生き物を観察する「ガサガサ」を通して、地域住民に多摩川の自然に触れる機会を創出している。

市と東京都の間を流れる多摩川は、山梨県笠取山の湧き水を水源とし、関東平野の南西部を経て東京湾へと注ぐ全長138km、流域面積1240km<sup>2</sup>を誇る一級河川です。「川崎」の地名は、多摩川の河口近くの三角洲にできたまちであることに由来するといわれています。

### あばれ川と有吉堤

脈々と水を運ぶ多摩川は、さまざまな恵みをもたらしてきました。江戸時代に始まった梨づくりもその一つで、多摩川下流域に梨畑が広がり、大正時代には一大名産地となりました。

この一方で、多摩川は「あばれ川」としての顔も持ちます。特に明治期後半から大正初期にかけて近代水害史に残る大規模な洪水を起こし、堤



明治43年の洪水被害で流失寸前の六郷橋  
所蔵／横浜開港資料館

防が整備されていなかった川崎側に甚大な被害を与え、住民の悩みの種となっていました。御幸村の住民を中心とする数百人は大正3年、デモ行動を取り締まる警察網を突破し、神奈川県庁へ押し寄せ、築堤の必要性を訴える「アミガサ事件」を起こします。当時の県知事は具体的な回答を示しませんでした。翌年に就

任した有吉知事は陳情を受け入れ築堤に着手。沿道をかさ上げすることで、大正5年に全長2.2kmに及ぶ代用堤防を完成させました。住民行動を端に生まれた「有吉堤」は、現在も中原区の中丸子児童公園などでその遺構を見ることができま

### 工場進出の呼び水

川崎の工業発展も多摩川の存在を抜きにしては語れません。川崎市の前身である川崎町は、明治末期以降、工場進出による地域活性化を図り、積極的に誘致政策をとっていました。

多摩川と鉄道という運輸面での利便性や広大な工場用地を確保しやす

い点などがあることから、明治40年に横浜精糖（現DM三井製糖ホールディングス）が最初に進出。次いで翌年には東京電気（現東芝）が、多摩川の川岸に工場を建設しました。この他、日本蓄音機商会（現日本コロムビア）、富士瓦斯紡績（現富士紡ホールディングス）、鈴木商店（現味の素）などの大規模工場が次々と進出し、川崎は日本を代表する工業都市へと急成長してきます。

### 「泡立つ川」と環境保護活動

大正13年7月1日に川崎町、大師町、御幸村が合併し、人口4万8394人の川崎市が誕生しました。ここから町村編入や産業発展に伴う人

口増加が続きます。

高度経済成長期を迎えた昭和32年には50万人だった人口は、昭和40年には85万人を突破しました。市は急激な人口増に耐えうる下水道整備を進めてきましたが、昭和40年代の普及率は30%未満。多摩川には洗濯などの生活排水が流れ込み、水質が急激に悪化していきます。

多摩川の近くに30年以上暮らし、その変遷を見守ってきた川崎の文化・環境の啓蒙活動を行う有志団体「多摩川クラブ」の中本賢さんは、「住民が洗濯をする昼11時ごろになると川面が白く泡立つんだよ。多くの生物が姿を消してしまった」と当時の振り返り、「でも、泡だらけの川を力強く泳ぐコイやフナを見つけ、水質が改善すれば、生き物は帰ってくる」と感じました」と話します。

同じように水質汚染を憂い、環境保全に目覚めた住民たちは、環境に優しい粉石けんの普及活動など多摩川の水質改善を目指します。

下水道普及率が90%を超える平成10年ごろになるとアユなどの魚もみられるようになりました。平成21年には、中本さんらは、多摩川流域では絶滅したとされていた、きれいな水が不可欠だと言われているハマグリを生息を発見。「ゴミだらけだった川崎の干潟をハマグリが暮らせる環境に戻すことができました。多く

### 新たな交流の場へ

市の努力で川が再生したの人の努力で川が再生したの喜びます。

市は現在、多摩川の歴史的・文化的資源、環境資源を最大限に生かすためにぎわいの場の創出を目指す「新多摩川プラン」を展開しています。令和元年度には堤防上のサイクリングコースの愛称を「かわさき多摩川ふれあいロード」としました。川の流れる景色もよく、多くの市民ランナーやサイクリストなどから親しまれています。

多摩区登戸では、令和4年8月から市と小田急電鉄が取り組む社会実験「登戸・多摩川カワノバ」が開かれています。キッチンカーの出店や地元団体と協働したスポーツイベントなど、多摩川を舞台とした新たな交流の拠点の創出を目指しています。

中本さんは、地元の子どもたちに多摩川の育む自然の魅力を伝えようと、大きな捕虫網をかぶせて揺さぶる「水辺の生き物観察『ガサガサ』」を開催しています。「多摩川は楽しい」と子どもたちも感じてもらって、その子が大人になった時、どんな多摩川であってほしいかを考えてもらう。多摩川は、新しい価値を生み、未来を探す場所なんです」

### 川崎歴史探訪

#### 多摩川スピードウェイ

昭和11年、丸子橋上流の河川敷に開設された日本初の常設サーキットです。第1回全日本自動車競走大会にはホンダの創業者・本田宗一郎氏も参戦するなど戦後の自動車産業を支えた人々の聖地とされました。昭和中期にその歴史に幕を下ろし、現在は観客席の一部が場所を変え残されている他、記念プレートが設置されています。

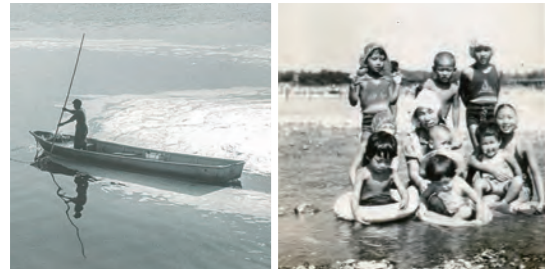
中原区上丸子天神町298



令和元年7月、西丸子小学校の児童と行われた「ガサガサ」で、捕まえた生き物について解説する中本さん



明治40年に進出した横浜精糖。多摩川の川岸に立地した  
提供／川崎市市民ミュージアム



右：昭和20年代に撮影された多摩川で水浴びをする人々。水がきれい  
いで、水中メガネをかけなくても魚が見えたという  
提供／高津区ふるさとアーカイブ

左：昭和53年ごろ、洗剤の泡が水面を覆う中運行する渡し舟  
提供／小池汪氏「川崎50年」

©多摩川スピードウェイの会

# 砂利輸送から始まった南武線 まちの発展を支える大動脈



鹿島田駅を発車する南武線車両

南北に細長く、政令指定都市の中で最も面積が小さい川崎市には、多くの鉄道が敷かれています。中でも川崎駅や武蔵小杉駅、登戸駅などの主要駅を結ぶJR南武線は、川崎市を縦貫する唯一の路線。時代のニーズに応じて市内の大動脈として地域の発展を支えています。

JR南武線は当初、「多摩川砂利鉄道」という名前でした。鉄筋コンクリートなどの原料となる多摩川の良質な砂利の輸送を目指していましたが、地元有志だけでは資金が調達できず、計画は暗礁に乗り上げていました。

そこに川崎の臨海部で埋め立て事業などを行っていた浅野セメント（現太平洋セメント）の創業者浅野総一郎氏が目を付け、鉄道会社を買収。



昭和2年に発行された「南武鉄道沿線案内図。砂利採取場と宿河原駅を結ぶ引き込み線が描かれている。所蔵/川崎市民ミュージアム

「南武鉄道」と改称し、奥多摩からセメントの原料となる石灰石を輸送するため、立川まで延伸する計画へと変更します。こうして昭和2年に川崎―登戸間で開通、昭和4年には立川

まで延伸し、現在の路線が形成されました。

その後、砂利乱掘が川の環境を変えてしまい、国は昭和9年から段階的に多摩川での砂利採取を原則禁止にしています。南武鉄道は、砂利輸送の役目を終えました。

鉄道の整備を呼び水に、昭和10年ごろから沿線に日本電気や東洋通信機、富士通などの工場が進出し、南武鉄道は労働者輸送と旅客輸送の役割を担います。戦中は軍需のために国営化され、戦後の高度経済成長を経て、現在のJR南武線となりました。沿線には住宅地が広がり、通勤・通学者をはじめとする多くの人々を運んでいます。

人口増の一途をたどる近年は、再開発の進む川崎区小田地区で平成28年に新駅となる小田栄駅が開業。多摩川の稲田堤駅では橋上駅舎化の工事が進むなど、沿線地域の発展、ま

52

川崎市民ミュージアム  
学芸員  
鈴木 勇一郎



東京と横浜という大都市に挟まれながらも、なお放つ川崎の独自性に興味が尽きません

専門は日本史で、特に近代以降の鉄道の歴史を研究する。令和2年に著書『電鉄は聖地をめざす』で国際交通安全学会賞の著作部門を受賞した。

ちの魅力向上の核になっています。

川崎市民ミュージアム学芸員の鈴木勇一郎さんは、「南武線は『これぞ川崎の路線』と言える重要な路線です。これからも川崎の発展に向けて、求心力を発揮してくれると思います」と、大きな期待を寄せています。

## 川崎歴史探訪

### さいわい緑道

多摩川の上流で採掘された砂利は、矢向駅から貨物専用支線を通して多摩川のほとりの川崎河岸駅へと向かい、船へと積み替えられました。昭和40年代に同線が廃線になると、その線路跡を利用して、さいわい緑道が造られました。緑道内には、電車をモチーフにした壁画などが残されています。



幸区河原町、神明町 他

53

案内人  
郷土史家  
あつし  
鈴木 穆



大山街道や文化人など、高津にまつわる歴史はまだたくさんあります

高津区文化協会前会長で、高津の郷土史を調査する。著書に高津の文化・風土・歴史を綴った『高津物語（上・中・下）』がある。

54

案内人  
溝ノ口駅前町会会長  
境野 勝之



交通アクセスが良く、新旧の住民同士が交流を深め、発展し続ける生活しやすいまちです

昭和25年ごろから溝ノ口に住み始め、現在はボレボレ通りの靴屋「末広堂」を営む。平成19年から溝ノ口駅前町会会長を務める。



昭和43年の東急溝ノ口駅から南武線武蔵溝ノ口駅改札方面を眺めた様子。写真右側には南武線線路が走り、写真中央部には「ヤストモ」の文字が確認できる提供/高津区ふるさとアーカイブ

## 平成の大改革 溝口から始まる脱炭素

KAWASAKI 199  
Roots of  
～99年から100年への「+1」～

区市街地再開発事業」が開始され、平成11年に完工するまでに、橋上駅舎化や大規模複合施設「NOCTY」駅間を結ぶペDESTリアンデッキが誕生し、駅前には市内有数の商業地が生まれました。

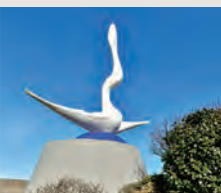
市は現在、2050年の脱炭素社会の実現を目指しています。令和2年には溝ノ口周辺に脱炭素モデル地区「脱炭素アクションみぞのくち」が創設され、現在では40を超える事業者・団体を取り組みに参加。市と市民・事業者が一体となった取り組みが評価され、令和4年4月に国の「脱炭素先行地域」に選定されました。

戦後から駅前の変遷を見届けてきた溝ノ口駅前町会の境野勝之さんは、「かつて蔵が並んだ大山街道にはマンションが建ち、若者の往来も増えました。溝口はまだまだ変わり続けるのでしょうね」と話し、溝口の発展に胸を膨らませています。

## 川崎歴史探訪

### 岡本かの子文学碑「誇り」

小説家・歌人の岡本かの子を偲び、昭和37年にかの子の息子が芸術家の岡本太郎らによって多摩川沿いの二子神社の境内に建てられました。明治22年に旧二子村に生まれたかの子は『母子叙情』『老妓抄』など多くの名作を世に残しています。



高津区二子1-4-1

溝ノ口駅からNOCTYと丸井、キラリデッキを望む

JR南武線と東急田園都市線が交差する溝ノ口。江戸時代には宿駅として栄え、近現代の工業化を経て、平成の再開発で大変貌を遂げました。現在は「脱炭素アクションみぞのくち」にまちぐるみで取り組み、時代をリードしています。

江戸時代、江戸から大山阿夫利神社を結ぶ大山街道の宿駅だった溝ノ口は、駿河の茶や真綿などを江戸へ輸送する商業と物流の中継地として発展しました。明治から大正にかけては、その面影を引き継ぎ、商家や蔵が街道筋に立ち並びました。

昭和2年に南武鉄道の武蔵溝ノ口駅、玉川電気鉄道の溝ノ口駅が開業すると、沿線に工場が進出。戦中は、多くが軍需工場となりました。高津の歴史に詳しい郷土史家の鈴木穆さんは、「現在のイトーヨーカドー溝ノ口店にあった日本光学工業（現ニコン）は、戦艦大和の計測器を製造していました」と話します。工場跡地は戦後、八咫電機（現富士通ゼネラル）や東芝玉川工場などへと建て替わり、川崎の電機工業の基盤となりました。

戦後間もなく、2つの駅の間に日用品が集まるヤストモマーケットや旭ストアが軒を連ねました。昭和30年代以降、鉄道の乗降者数は一層増加。駅前広場や周辺道路が狭かったため、交通渋滞の解消と歩行者の安全確保が喫緊の課題となります。

そこで昭和63年に「溝ノ口駅北口地



多くの人往来し、活気溢れる昼時の銀柳街

## 400年前から変わらぬにぎわい その原点は「人の往来」



川崎駅前周辺で、せわしく行き交う人々や車。江戸時代の東海道川崎宿から現代にかけて、駅前エリアはにぎわい続けてきました。市制99周年を迎える令和5年度には、川崎市役所の新本庁舎が完成し、さらなるにぎわいの創出が期待されます。このエリアが人を引き付けてきた歴史と、その秘密を探ります。

KAWASAKI Roots of 99  
55  
案内人  
東海道かわさき宿交流館 館長  
**青木 茂夫**

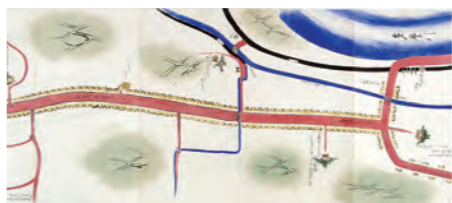
川崎に集まった人々同士で交流が生まれ、多文化が混じり合うことで活気が生まれています

川崎区で生まれ育つ。平成25年に東海道川崎宿の歴史・文化を後世に伝える情報発信拠点の「東海道かわさき宿交流館」館長に就任。現在の川崎宿は関東大震災や川崎大空襲の影響で焼失したが、同館では当時の街並みを再現したジオラマが設置され、そのにぎわいをうかがい知ることができる。

全国有数のターミナル駅・川崎駅。日中は学校や勤務先へ向かう人でごった返し、日が落ちてくると、どこからともなく路上ライブのサウンドが響く中を学生や社会人が通り過ぎていく、にぎわいの中心地として知られています。

### 東海道川崎宿の繁栄

このにぎわいの源流をたどると、江戸時代の東海道川崎宿に行き着きます。東海道とは、江戸から上方（京阪へ至るまでの道のこと）です。元和9（1623）年、品川宿と神奈川宿の中間に五十三次の宿場の中でも最後の方に設置された川崎宿は、新宿・砂子の2村から始まり、その後、久根崎・小土呂が加わりました。江戸後期になると、庶民の間に社寺参詣のブームが広がり、厄除け大



当時の川崎宿の様子が記された『川崎宿往還絵図』。県内の宿場町で、3番目の旅籠の多さを誇った所蔵/川崎市市民ミュージアム

師として当時から有名だった金剛山金乗院平間寺（川崎大師）には、全国から多くの参詣者が集まりました。東海道かわさき宿交流館の青木茂夫館長は、「街道沿いには茶屋や日用品土産物の店が並び、ピーク時には72軒の旅籠屋がありました。川崎にとつて、川崎宿は初めての『にぎわい』だったんです」と話します。

しかし明治期に入ると、明治5年に官営鉄道の品川―横浜間の駅のひとつとして「川崎停留所」が開業。明治32年に関東初の電気鉄道である大井町線（現京急大師線）が開業しました。昭和2年には、南武鉄道（現JR南武線）が開通し、人やモノの流れは、川崎宿周辺から川崎駅周辺へと移行していきました。

### 「映画」が生んだまち

駅前周辺に往来の軸が移った昭和から現在に至るまで、にぎわいをけん引する企業が、チッタグループです。創業者の美須鏡氏は、川崎駅前にあった約2600坪の葦が生い茂る湿地帯を購入し、昭和12年に映画



上：川崎大空襲から7年後の銀柳会の商店街提供/チッタエンタテインメント

下：国内でもいち早く復興を遂げた「ミスタウン」。昭和40年代には多くの人でにぎわった提供/チッタエンタテインメント

館「川崎銀星座」をオープンしました。このころは、ちょうど市内に大工場が進出し、市外から工場労働者が流入していた時期。映画という娯楽は時代のニーズを捉え、オープンから3年後には、6館の映画館による一大繁華街を生み出しました。

しかし昭和20年4月15日、多くの軍需工場を擁する川崎は戦火に包まれます。駅前を含む市中心部と南武線沿いの工場が集中する地域を襲った「川崎大空襲」によって、壊滅的な被害を受けました。

この絶望的な状況から美須氏はわずか半年でバラック屋根の映画館を再開し、再び一大映画街を築きました。この銀幕による興隆の歴史もあり、昭和24年に川崎駅東口側に発足した商店会は、「銀」の字を取って「銀柳会」と名付けられました。

その後、同グループは高度経済成長期に大人が楽しめるダンスホールや、家族で楽しめるボウリング場といった総合レジャー集積地として事業を拡張、エンターテインメント産業の雄としての地位を確立していきます。昭和60年代には日本初の大形シネマコンプレックス「チネチッタ」や、ライ

ブホール「クラブチッタ」ができ、今でもヒップホップやストリートダンスといった川崎の若者文化の発信の場となっています。

### 工場跡地からの都市再開

「もはや戦後ではない」と宣言された昭和30年代の川崎駅前には、駅舎の改築や駅前デパートの建築、駅前商店街の振興などの発展が進み、国内でもいち早く復興を遂げます。

昭和47年4月1日に市が政令指定都市に指定されたことから、駅前周辺エリアは、建物の老朽化や駅前広場などの都市機能の未整備、さらに横浜駅に百貨店が進出したことによる集客力・購買力の低下といった課題を抱えていました。

この解決のために東西口の再開発が進められました。駅東口では、昭和47年に川崎初の百貨店「小美屋」が増築。昭和48年に店舗を取り壊した岡田屋は、工具のまちのイメージから若い女性が訪れるファッションビルとして、その7年後に「川崎岡田屋モアーズ」として生まれ変わりました。これ以降、東口駅前広場や駅東口地下街「アゼリア」が整備され、三菱電線工業工場跡地には大型商業施設「ルフロン」が生まれ、活気を取り戻していきました。

駅西口は、大工場が立ち並ぶ国

内有数の工業地帯でしたが、平成以降、明治製菓跡地にソリッドスクエア、市営住宅や飲食店のあった地区を再開発し、ミューザ川崎シンフォニーホールが誕生。平成12年に閉鎖した東芝堀川町工場跡地にはラゾーナ川崎プラザがオープンし、現在の川崎駅周辺が形作られたのです。

### さらなるにぎわいへ

令和4年11月には、川崎駅東口一帯で、市やチッタエンタテインメントなどが主体となり、「第1回川崎夜市」が開かれました。ジャズサウンドが鳴り響く中、川崎のソウルフードが市内外の来場者に振る舞われ、さらなるにぎわいを生み出しています。

令和5年度に開庁する川崎市役所新本庁舎の建設地は、駅東口からまっすぐ延びる市役所通りと京急川崎駅から続く京急通りが交わる位置にあり、これらの通りはかつての東海道とも交差しています。コンセプトは「にぎわい創出」。多様な人たちが集う空間となることを期待されています。

江戸時代から人々を引き付け、発展を遂げてきた駅前エリア。「人々の往来を原動力に、立地や土地資源を有効活用していく姿勢こそ、川崎がにぎわい続ける秘密なのかもしれませんね」と、青木館長は教えてくれました。

### 川崎歴史探訪

#### 稲毛神社

明治以前は「河崎山王社」と称され、現在も「山王さん」の愛称で親しまれています。江戸期には東海道川崎宿の総鎮守として崇敬を集めました。江戸後期刊の『東都歳事記』で「駅中にて花だし、踊り等出して賑える事甚し」と記された例大祭の「川崎山王祭」は今も続いており、市役所通りなどを練り歩き、川崎の夏を盛り上げています。

川崎区宮本町7-7



第1回川崎夜市の様子。川崎ソウルフード屋台では約20店舗、川崎駅前バル祭りでは約60店舗の市内飲食店が参加し、大盛況だった提供/チッタエンタテインメント





水色に染まった等々力陸上競技場で声援を送るサポーター

©KAWASAKI FRONTALE

国内スポーツ界の強豪クラブが拠点を置く川崎市では、サッカーJ1・川崎フロンターレをはじめとする6チームが「かわさきスポーツパートナー」として広く市民に親しんでいます。企業チームを前身とする川崎フロンターレは、いかにして地域に溶け込み市民に愛されるクラブへと成長しているのでしょうか。

川崎フロンターレは、平成29年から令和4年の間でJ1リーグ戦を4回優勝する強豪クラブ。W杯カタール大会では多くの出身選手が活躍し、三笥薫選手と田中碧選手の「鷺沼兄弟」の愛称は日本中を席巻しました。その前身は富士通サッカー部です。昭和10年に武蔵中原駅前で開催した富士通信機製造（現富士通）川崎工場の従業員が、昭和30年に創部しました。Jリーグ開幕から3年経った平成8年、同部はプロ化。Jリーグ加入を目指し、ホームスタジアムに等々力陸上競技場を据えます。翌年には市民公募で「川崎フロンターレ」と改称し、今のクラブが誕生しました。

改称後も選手は従業員とプロが混じり合うクラブでしたが、企業色を払拭し、地域密着を目指して走り出します。クラブ創成期からチームを支えるタウンコミュニケーション事業部の天野春果事業部長は、「朝に商店街に行き、夜にも商店街に行く。地域に知ってもらい、応援してもら

KAWASAKI 199  
Roots of  
~99年から100年への「+1」~

## 川崎フロンターレ 企業色を脱し市民クラブの新境地へ

ために必死でした」と振り返ります。その熱意は商店主らの心を徐々に動かし、今では多くの商店街でポスターやタペストリーが掲げられています。市民と選手の熱狂が渦巻くホームゲーム。試合前にはサポーターが「川崎市民の歌」を歌って気持ちを高ぶらせ、試合後には、試合で最も活躍した選手へ、商店街の協賛品を集めた「あなたが大賞」が贈られています。熱狂の舞台である等々力陸上競技場は今後、現状より約8千人多い3万5000人を収容する球技専用スタジアムへの改修が予定されています。運営には川崎フロンターレも携わり、魅力溢れるスタジアムづくりが進められています。

商店街を巻き込み、市に「水色」のイメージカラーを広げている川崎フロンターレ。市民と共に走り続けるその先に、市民クラブの新たな境地があります。

### 川崎歴史探訪

#### 等々力陸上競技場

等々力陸上競技場は、昭和41年に使用が開始されました。当初はメインスタンドの観客席以外は芝生席でしたが、幾度かの改修を経て、現在は27,495席となりました。陸上競技場のある等々力緑地には、等々力球場やとどろきアリーナなどの施設が立地しています。



中原区等々力1



平成10年から続く「あなたが大賞」。平成19年3月3日の受賞者は中村憲剛氏で、川崎市商店街連合会から「せとか」が贈られた

KAWASAKI Roots of 99  
57

案内人  
川崎フロンターレ  
タウンコミュニケーション事業部  
事業部長  
**天野 春果**

工業都市の武骨な風合いが残るまち並みと義理堅い商店主たち。彼らの応援で今のチームがあります

川崎フロンターレ創成期から商店街をくまなく訪れ、顔の見える関係を構築。現場で蓄積した人脈とアイデアを生かしたイベントを数多く手掛け、地域に愛されるクラブへと押し上げた名物仕掛け。



季節ごとに変化を見せるメタセコイア並木

## 緑の宝庫・生田緑地 誕生の背景に都市防空あり

KAWASAKI 199  
Roots of  
~99年から100年への「+1」~



平成11年ごろの向ヶ丘遊園のシンボル「花の大階段」  
提供/向ヶ丘遊園の緑を守り、市民いこいの場を求める会「わたしの向ヶ丘遊園」

市内最大の約180haの広さを誇る緑の宝庫・生田緑地は、都会のオアシスとして、市内外から多くの人が訪れています。その誕生には、戦火から都市を守る都市防空が関係していたことは、あまり知られていないのかもしれませんが。

桜が咲き誇る春、ゲンジボタルが幻想的な光で舞う夏、高さ30mを超えるメタセコイア並木が色づく秋、日本民家園が雪化粧をする冬。生田緑地では四季を通して多彩な自然や文化を体感できます。

現在の生田緑地の区域内に最初に誕生したのは、昭和2年に小田原急行電鉄の新宿―小田原間の開通を機

川崎歴史探訪

榎形山  
標高84mの榎形山は、鎌倉時代の武将・稲毛三郎重成の城跡だったと伝えられています。戦中、アメリカ軍の来襲に備える探照灯基地があったとされる他、広場には、疎開生活の記憶を伝える「輝け杉の子」像が置かれています。

多摩区榎形6-26

KAWASAKI Roots of 99  
56

案内人  
生田緑地マネジメント会議  
会長  
**松岡 嘉代子**

ほぼ毎日散歩に訪れる生田緑地。四季折々で違った表情を見せてくれて、飽きることはありません

向ヶ丘遊園や生田緑地の近くで生まれ育つ。平成14年に市民団体「向ヶ丘遊園の緑を守り、市民いこいの場を求める会」を立ち上げ、同園跡地が市民のいこいの場として存続するよう、活動を続けている。令和4年から生田緑地マネジメント会議の会長に就任。

まなプロジェクトが展開されています。同会議の松岡嘉代子会長は、「生田緑地は、市制100周年を迎える令和6年度に開かれる全国都市緑化かわさきフェアの3つのコア会場のひとつに選ばれています。どんな催しにするか、今から楽しみです」と話し、来場客をもてなす準備を進めています。



左：昭和14年ごろの諏訪（高津区）の風景。機械化以前の農作業は馬が主力だった。写真手前の2人の子どもははだして農作業を見守っている  
提供／川崎市『かわさきのあゆみ』  
右：平成元年に撮影された宮前区初山の田植えの風景。近所の人同士の連帯組織で田植えが行われた  
提供／小池汪氏『川崎50年』



昭和52年に現在の宮前区馬絹で撮影された地下の「室」での作業風景  
提供／小池汪氏『川崎50年』

# 都市農業が息づくまち 育まれる挑戦の芽



工業都市の印象が強い川崎市ですが、田んぼや果樹園、野菜畑など、自然豊かな農の風景もまちの顔の一つです。江戸時代には多摩川の豊富な水を生かし、広大な田園地帯が形成され、昭和40年代には梨の観光農園を流域に広げました。現代では都心からのアクセスの良さを生かした都市農業が根付いています。

近年、農業を取り巻く環境は担い手不足や高齢化、農地の減少など厳しい状況となっています。そんな中、宮前・多摩・麻生区を中心に約520haの農地面積を有する市では、消費者と生産者の距離が近いという都市的立地を生かし、市場を通さない直売の取り組みや、イチゴ狩り、梨狩りといった観光農園も盛んで、若い就農者にも魅力的な経営環境があります。

## 多摩川と二ヶ領用水

川崎の農業は多摩川から大きな恩恵を受けてきました。上流の肥沃な

土壌が周辺流域に届けられ、昔からさまざまな農業が営まれていました。


江戸時代には多摩川の水利を生かし、大消費地・江戸の腹を満たすため、慶長16（1611）年に稲毛領と川崎領にまたがる用水路「二ヶ領用水」が整備されました。現在の川崎区や幸区にあたる場所でも新田開発が進み、米の生産量を伸ばしました。

二ヶ領用水の誕生から100年が経つと用水路の老朽化問題が現れます。江戸中期には、用水路改修と下流域での新田開発が積極的に行われ、さらに多くの水田が開拓されました。川崎の地名に残る「新田」の多くは、この時の名残といわれています。

二ヶ領用水は、豊かな田園地帯を築いただけではありません。明治26年、大師河原村出来野（現川崎区日ノ出）に住む当麻辰次郎氏が発見した「長十郎梨」は、病害に強くて甘

KAWASAKI Roots of 99  
**58**

JAセレサ川崎  
代表理事組合長  
**梶 稔**



古き良き歴史の文脈と最先端のカルチャーが溶け合い、新たな魅力が生まれる素敵なまちです

正組合員5,000人、従業員1,000人を超えるJAセレサ川崎の代表理事組合長。麻生区で代々続く農家の5代目でもある。JAセレサ川崎は、平成9年に市内にあった4つのJAが合併し誕生。大型直売所「セレスモス」の運営や農業者の支援を行っている。

みがあることから瞬く間に人気を呼び、川崎区から多摩区にかけ多摩川に沿うように梨畑が広がりました。戦中の伐採で梨の栽培面積は、最盛期の約230haから約37haまで減少しましたが、戦後に市は果樹苗の導入を助成し、昭和38年には125haまでV字回復を成し遂げます。当時を知るJAセレサ川崎の梶稔代表理事組合長は、「昭和40、50年代は、最盛期を迎え、どの梨農園も大盛況だったのを覚えています」と話します。

関東における梨の一大産地としてブランドイメージを定着させた川崎では、現在でも多摩区を中心に「多摩川梨」が栽培されています。

市全域に広がった農の風景は、大正初期からの工業化の波に押しされ、臨海部の新田や梨園が姿を消し、工業地帯へと塗り替えられています。

その後も工場労働者などの流入で人口が増加すると、農地の宅地開発が進みました。

こうして、東部には工業地域が広がり、北西部には農業地域と住宅地が同居する、現在の川崎市の様相が形成されていきました。

## 馬絹の花桃と 柿生・王禅寺の禅寺丸柿

都市化が進んだ現在でも、市内にはご当地ならではの伝統農産物が残っています。

宮前区の馬絹で生産される花梅や花桃は、江戸時代から「馬絹の枝物」と評判で、お祝い事や雛祭りなどで重宝されてきました。この製造技術は、大正時代に確立されました。畑で切った花枝を「室」と呼ばれる一定の温度と湿度を保った暗室に入れて成長させ、開花時期を調整します。

つぼみが固いうちに切り出した枝を束ねて花芽の向きをそろえ、見栄えを良くする「枝折り」は、日本有数の伝統技術として現代の生産者に引き継がれており、色鮮やかな馬絹の花桃は春の節句を彩ります。

麻生区の王禅寺が発祥の「禅寺丸柿」は、日本で確認された甘柿のうちで最も古いとされています。約800年前の鎌倉時代に王禅寺の裏山で甘みの強い柿が発見され、江戸中期から栽培が本格化。昭和前期まで多く流通していました。昭和中期から禅寺丸柿に代わり実の大きい新品種が登場したことで生産量は減少しましたが、王禅寺周辺の農家には、今も樹齢数百年の古木が残り、地元生産者の「柿生禅寺丸柿保存会」が旗振り役となって地域固有の品種を守り続けています。

## 農業の転換期、新時代へ

近年、元システムエンジニアなど、農業とは無縁だった若手の新規就農者が市内で増えつつあります。梶組合長は、「異業種のノウハウが持ち込まれ、新しい農業のあり方が生まれるかもしれません」と熱い視線を向けています。

観光農園を起業する就農者も多く、10年前は数件だったイチゴ園は今では10件を超えるほど。人口150万

人以上の市場を足元に有し、都心からもアクセスしやすい川崎では、イチゴ狩りに訪れる観光客を期待でき、高い収益性が見込めます。農作業がしやすく、大人でも子どもでもイチゴ狩りを楽しむことができる高設栽培を取り入れる農家も増えています。

麻生区では、20代、40代の若手農家が地産地消を呼びかけ、直売流通を広げる取り組みも進んでいます。区内農家の2代目、3代目が集まった団体「畑から、台所へ。」は、若い世代にも地場野菜のおいしさを知ってもらおうと、従来の農家のイメージを一新しました。白いシャツにデニム生地のエプロンをユニフォームとして身にまとい、地域のマルシェイベントなどへの出店や、動画サイト「YouTube」を活用した情報発信を積極的に行っています。同団体代表の井上広基さんは「川崎市産、麻生区産の地元で作られた新鮮な野菜を食べられることは、魅力です。もっと楽しんでもらえるように、これからも情報を発信していきたい」と意気込みます。

梶組合長は、「JAとしても就農支援に取り組んでいます。若い農業者が切磋琢磨する中で生んでくれるであろう新たなアイデアに期待したいです」と話し、都市農業の未来を切り開こうとする若き挑戦の芽を見守っています。

## 川崎歴史探訪

### 禅寺丸柿

麻生区の「柿生」の地名の由来にもなった禅寺丸柿。王禅寺には、樹齢450年程とも伝えられる禅寺丸柿の原木があります。その原木を含む7本が国登録記念物に登録されており、江戸期から昭和前期にかけて人気を集めた禅寺丸柿の歴史を感じることができます。



麻生区王禅寺940 他



高設栽培を取り入れている市内のイチゴ農園  
提供／JAセレサ川崎